

# 胃がんの腹腔鏡手術について

消化器センター 消化器外科部長 新田敏勝医師

前回は内視鏡(胃カメラ)による胃がんの発見と治療についてのお話でした。今回は内視鏡では手術できない胃がんの腹腔鏡手術について新田医師に話を聞きました。

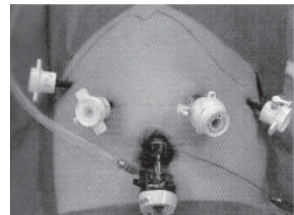
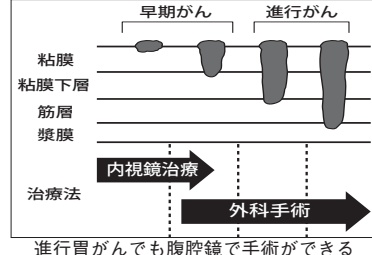


日本消化器外科学会指導医  
日本消化器内視鏡学会指導医  
日本消化管学会胃腸科指導医  
日本内視鏡外科学会技術認定医  
日本内視鏡外科学会評議員

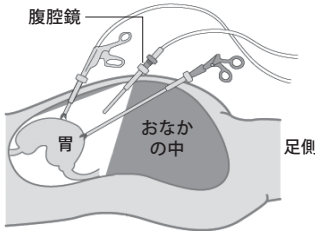
## 胃がんの進み方と手術

まずは前回の太田医師の話のおさらいです。

胃の粘膜構造は粘膜層↓粘膜下層↓筋層↓漿膜(しようまく)となっており、胃がんはまず一番上の層である粘膜に発生し、横に広がった後、胃の内側から外側に深く浸潤していきます。がんが粘膜下層迄で止まっている場合は「早期がん」とされ、内視鏡での治療の可能性が高くなります。しかし、その下の筋層以上に深く浸潤した「進行がん」は、筋層に沢山の血管やリンパ管が通っているために、がん細胞が血流やリンパの流れにのって転移しやすくなります。この場合の治療は胃の切除と同時に胃周辺のリンパ節を取り除くリンパ節郭清(かくせい)、そして食物の通り道を作り直す再建手術も行わなければなりません。早期がんでも20%は



カメラポートを含めた5ポートを挿入した状況



## 胃がんでも腹腔鏡で手術ができる

胃がんはすべて開腹手術を行っていた時代に、私が大学の医局にいた2000年から内視鏡手術の手法が確立されました。腹腔鏡手術とは腹部に5mm〜1cmの穴を5〜6カ所あけ、特殊な鉗子やメスを入れる通路となる器具(ポート)を挿入します。ポートの1つから内部を映すカメラ(腹腔鏡)を入れ、その映像をモニターで見ながら鉗子やメスを操作して胃やリンパ節を切除します。胃がんの手術には幽

## 経験豊かな執刀医を選ぶこと

胃がんの腹腔鏡手術は2002年から健康保険適用になり、進行胃がんの一部にも施行され、実施例は格段に増えました。この手術のメリットは、開腹する場合と比較して、患者さんの体への負担が非常に軽く、傷口も小さいので回復時間が早いなど沢山あります。しかし、内容は開腹手術と同じなので出血や感染リスクは同様にあり、何より腹腔鏡手術はテレビモニターで様子を確認しながら器具を正確に扱うという非常に高い技術が要するため、経験豊富な医師による執刀が必要です。当院では技術認定医が2名在籍し、「手術をする」ではなく「病気を治す」「安全第一」を目標に掲げて日夜厳しい研修を行っています。ご質問のある方はお気軽に外来までお越しください。